

## 〈研究ノート〉

# フランス分析官レジナルド・カンと その『フォルモサ報告』

ワシーリー・モロジャコフ

## 要 旨

台湾を開拓・開発する日本の政策は、その初期から、日本国内及び海外（特に欧州）の分析官が注意深く調査・検討していたテーマであった。当時、植民政策、植民地の開拓・開発は、「野蛮人〔当時の表現でアジア・アフリカの原住民〕と野蛮地〔当時の表現でアジア・アフリカの大部分の地域〕を文明化する運命」と見られて、キリスト教・「白人」の国家だけが可能な事業と考えられていた。キリスト教・「白人」の国家でない日本が植民政策を実施するという試みは、近代史上初めてののこととして世界の関心を集めた。キリスト教・「白人」ではない国家・民族が、他のキリスト教・「白人」ではない民族（原住民）を「文明化」できるのかどうかと。

台湾が日本の植民地になった頃には、「白人」の欧米世界では植民政策の内容と方法、その成否の基準ははっきりと理解されていた。日本政府、政治エリートから見れば、台湾における植民政策の「成功」は、経済的、軍事的利益ばかりでなく、世界における日本のイメージ構築にとって非常に重要であった。しかし、台湾からの現地情報、特に日本植民政策の成功に関する情報は、ほとんど全て日本発だったので、かえって欧米読者の疑念を深める結果になった。

フランス人ジャーナリストのレジナルド・カン（Réginald Kann:1876～1925年）は、日露戦争中、日本陸軍駐在特派員であった。1906年夏にフランスの植民地省、海軍省、参謀本部第2課（情報機関）の命令で出張分析官として、情報収集のため台湾を訪問し、帰国後、内部資料として『フォルモサ報告』を執筆した。この未公刊資料は2001年にフランス語の原文と中国語訳が台北で刊行された。本論文の目的はこのレジナルド・カン著『フォルモサ報告』の内容と結論を詳しく紹介することにある。

キーワード：台湾、フランス、植民政策、資源開発、原住民、民族問題

## 1. キリスト教・「白人」の列強が調査・評価する日本植民地政策—序として

台湾を開拓・開発する日本の政策は、その初期から、日本国内及び海外（特に欧州）の分析官によって注意深く調査・検討されていたテーマであった。当時、植民政策、植民地の開拓・開発は、「野蛮人〔当時の表現でアジア・アフリカの原住民〕と野蛮地〔当時の表現でアジア・アフリカの大部分の地域〕を文明化する運命」として見られており、キリスト教・「白人」（当時の表現として）の国家だけが可能な事業と一般的に考えられていた。キリスト教・「白人」の国家でない日本が植民政策を実施するという試みは、近代史上初めてのこととして世界の関心を集めた。つまり、キリスト教・「白人」ではない国家・民族が、他のキリスト教・「白人」ではない民族（原住民）を「文明化」できるのかのどうかと。

台湾が日本の植民地になった頃には、「白人」の欧米世界では植民政策の内容と方法、その成否の基準ははっきりと理解されていた。アメリカ人政治学者ポール・ラインシュ（※英文名）が執筆した研究論文『植民行政』と『植民政策』（1910年に日本語に翻訳された）は、その代表的なものである。日本でも欧州国家の植民政策の経験が検討・分析されていた。特に台湾総督府民政長官を勤めた後藤新平は、イギリス、フランス、ドイツなどの経験に基づいて日本の新しい「学問的植民政策」を策定していた。

日本政府、政治エリートから見れば、台湾における植民政策の「成功」は、経済的、軍事的利益ばかりでなく、世界における日本のイメージ構築にとって非常に重要であった。明治維新以後、日本の政治エリートの主要な目的は、近代文明国家として日本と欧米「列強」との総合的平等を達成することにあった。

19世紀末、近代文明国家、また「列強」と認められるためには、植民地の所有が必要な条件と考えられた。地球のほとんど全域に植民地を持っていたイギリスとフランスは、当時のパワー・ポリティクスにおける「世界の支配者」と一般に認められていた。オランダ、ベルギー、ポルトガルなどは、イギリス、フランスと競合することなく、海外に植民地を所有していたため、それなりに国際的地位を保っていた。スペインの国際的地位は、1898年にアメリカとの戦争に敗れ植民地を失って低下した。ドイツとイタリアは、国家統一後、海外植民地の獲得を目指した。「列強」の中で唯一帝政ロシアだけが海外植民地を持っていなかったが、シベリアの各地で非キリスト教・「白人」の「野蛮」民族の「文明化」に経験を持っていた。そのため、シベリアは時に「国内植民地」と呼ばれた。

このような欧米の事情に深い認識をもっていた後藤新平は、「学問的植民政策」の必要性だけでなく、海外向けの正確な情報発信の必要性を十分理解していた。そこで、後藤の主導する台湾総督府では、日本語、外国語を問わず多数の報告書が公刊された<sup>(1)</sup>。後藤自身の前書き付きで刊行された植民学者・政治家竹越與三郎（当時衆議院議員）の著書『日本統治下の台湾』の英文翻訳（1907年）も、そのような事業の一環であった<sup>(2)</sup>。

台湾からの現地情報、特に日本植民政策の成功に関する情報は、主に日本発であった。そこで、人種的偏見を持ち、非キリスト教・「白人」の日本人が非キリスト教・「白人」の原住民を「文明化」できるかどうか疑問視していた当時の欧米読者は、日本の植民地政策報告の公平性に対して疑念を深めていた。一言でいえば、その成果報告を疑っていたのである。一方、現地に長年住んでいる欧米人（外交官、宣教師、医者、商人など）からの情報は、より懐疑的であり、かつ公平と見られた。その情報は、主に英米人が英語で発信したものであった。

## 2. アジアでのフランス植民地政策とレジナルド・カンの台湾出張

第三共和国政権下で植民政策を強化してインドシナでの立場を固めつつあったフランスも、台湾事情を観察していた。明治日本の政治エリートの親英的政策により、台湾開拓の可能性に焦点を当てた仏日協力の試みは失敗に終わり、1884～1885年の清仏戦争のさ中に行われたフランスの台湾出兵も失敗に終わった<sup>(3)</sup>。1895年、フランスがドイツとロシアとともに三国干渉に参加したことで、日仏関係は悪化した。日露戦争中フランスはロシアの同盟国であった。「非白人」日本の「白人」ロシアに対する勝利、それが日露戦争の主要な結果と見られた。そして、フランス政府は、日本の植民政策をより詳しく検討することに意を決したのである。

1905年11月、フランスの植民地省（日本の拓務省に当たる）、海軍省と参謀本部第2課（情報機関）は、台湾の資源と情勢、また日本植民政策の方法と結果を調査するために分析官の台湾派遣を決定した。派遣は公式な事務であったが、出張を命じられた分析官は外務官僚でも軍人でもない一人であった。

出張分析官に選ばれたレジナルド・カン（Réginald Kann; 1876～1925年）は、今ではほとんど忘れ去られた人物である。フランス語のウィキペディアにも載っていない。カンは、サン・シール陸軍士官学校を卒業したが、その直後退職してジャーナリストになった。軍事教育を受けたカンは、フランスの主要媒体である『Le Figaro』紙と『L'illustration』紙の軍事特派員になって、ボア戦争などを現地取材した。日露戦争中、カンは日本陸軍駐在特派員となり、『軍事特派員の極東日記——日本、満州、朝鮮』を執筆している<sup>(4)</sup>。その読みやすく興味深い著作は、著者の作家的素質と闊達さだけではなく、情報の収集・分析能力の高さも併せて証明するものであり、価値の高い史料であると筆者は見る。

カンの立場は反日ではないが、「ウイスキー臭い」英米記者（親日の英米人に対するフランス人の代表的な風刺表現）の明らかな親日的立場とも違った。日本陸軍をかなり高く評価もしたが、さまざまな批判も行った。カンの日記を総合的に吟味したあと、筆者は、透徹した公平な観察者というカンの特質が、彼が出張分析官としての任務を拝命するに至った理由であった、と納得した。

1906年夏、カンは台湾を訪問した。一か月足らずの滞在であった。あいにく児玉源太郎総督も後藤新平民政長官も留守であった。訪問の公的な性格と駐日フランス公使ジュール・アルマンの努力にもかかわらず、台湾総督府はカンの任務をほとんど援助することなく、わずかな情報しか与えなかった。

とはいえ、帰国したカンは公式な『フォルモサ報告』を準備し、収集した情報に基づいて専門的な論文も数件公刊している。『軍事特派員の極東日記』と違って、内部資料として作成された『フォルモサ報告』は、未公刊のまま文書館に保存された。中華民国の中央研究院台湾史研究所の専門家は、このカンの報告書を発掘して、2001年に台北でフランス語の原文と中国語訳を単行本として刊行した<sup>(5)</sup>。日本ではこの興味深い資料はまだ分析・研究されていない。

### 3. レジナルド・カンが見た台湾における日本の植民地政策の目的、方法と結果

カンの報告書は、業務文書であり、公刊向けではないが、カンは課題に従って、さまざまな情報を収集し、その一次的分析も行っている。台湾事情の分析において、カンは、当時の水準で評価すれば、かなり透徹した公平な観察者であった、と筆者は考えている。

報告書の第一部『総合的判断』（137～143頁）は、日本の対外政策にお

ける台湾の位置づけを検討している。軍事分析官としてカンは、「アジア大陸と太平洋の間に、シンガポールから間宮海峡までの島の長い列」において大陸に最も近い島である台湾の戦略的な意義、日本が具体的に実行可能な南方拡大（出兵を含めて）のための「天然の基地」としての重要性を強調した（138～140頁）。「極東の植民地から白人を追放する夢を日本人は強く心に抱いている」と著者はコメントしている（139頁）。つまり、日本の南方侵略・拡大は、「列強」の地政学的（カンの表現ではなく、現在の表現として）競争において、将来、フランスのインドシナへの潜在的な脅威になる可能性がある、とカンは警告した。カンの1906年におけるこの予言は、太平洋戦争中に的中することになる。

台湾の戦略的な意義を評した後、カンは日本の開拓政策を総合的に評価した。「フォルモサにおいては中国人の住む地域が東京の郊外と同じように安全になった」（141頁）ことから分かるように、日本の植民行政は、1902年に島内の匪賊（原住民とは別に）と臨海地帯の海賊に勝利した、とカンは認めた。しかし、「野蛮人」と一般的に呼ばれた原住民が現地の中国人に対しても日本人に対しても抱いている敵意のため、また衛生状態の問題のため、日本国内から台湾への日本人の移民政策は実現されなかった。「その失敗の影響で、〔日本〕行政はフォルモサの植民化計画を見直して、移民のための領土というよりはむしろ開発のための領土と見なすこととなった」、とカンは説明した（140頁）。

カンはまた、台湾における日本警察の特別な地位と役割を強調した。警察官は、台湾を「平和化」して安全を保障しているだけでなく、「市民と行政の間の主要な媒介者」であり、台湾領土の相当部分をまだ支配している「野蛮人」から現地の市民（主に中国人）を防衛していると指摘するが、一方で「侍階級の出身者である日本人警察官は自国〔日本〕の農民を憎む以上に、フォルモサの農民を憎んでいる」ので、中国人が日本人に対して感じるのは「好感が全くない恐怖の念だけ」だ、とカンは結論した

(141～142 頁)。

台湾人向けの教育体制に関してカンは次のように評価した。日本は、小学校レベルの教育を「予想以上に発展させた」(203 頁)が、中学校レベル以上の教育をあまり発展させなかった。より高いレベルの教育が台湾人の「若い世代に自由と不従順の考えを抱かせる可能性がある」、とこのフランス人分析官は論じた(144 頁)。

軍事と行政の問題を概説する中で、カンは台湾の財政と経済状態を検討した。フランス植民地省は、植民地として台湾が「赤字」なのか「黒字」になったのかに関心を持っていた。これに対してカンは、特に日露戦争以後、「フォルモサは、他の新しく所有された植民地と同様、財政状態が厳しくなっている」、と推論した(142 頁)。日本政府が行政官僚の人員、給料の削減や警察官の兼務する業務の拡大によって台湾開発のための直接費用を軽減し、本土からの個人投資を促進しているのは、そのためであると分析している。

カンは親日的ではないが、日本の台湾政策の成功を認めて、次のように結論をしている。

「現地の〔台湾〕人は、日本人に対する強い敵意のため、日本統治時期の10年間の偉大な利益を無視している。衛生の各種施設及び〔台湾総督府〕医学校の設立によって、疫病の脅威は軽減した。現在の保安状態は、フォルモサ歴史上の恒常的な混乱とはっきり対照的である。平和化の結果として、農業が以前に比べて驚異的に発展している。作付け面積が非常に広がって、農産物が新しい品種の導入のため改善した。頻発していた飢餓はもう忘れられてしまった。現在のフォルモサは、米の輸入の代わりに米を輸出している。砂糖、樟腦、茶などの高価な商品の生産が高まっている。石炭、金、石油、硫黄などの資源も開発されている。フォルモサ資源開発の最初の結果は貿易の急速な増大である。しかし、植民行政が日本の国益だけを考えて、現地の利益を無視しているという批判が高まってい

る」(142～143頁)。

日本統治の期間はまだ短かったが、経済、農業、貿易などの分野における成功は顕著であった。しかし、台湾の「文明化」政策の結果に対して、当時の欧州植民地政策の基準で考えたカンの評価と結論はもっと批判的であった。「フォルモサの新しい持ち主〔日本人〕は、自分を黄色人種の解放者と考えるが、現地の平民の教育、自由、民権の期待を裏切った。日本人は、他の攻略された国と同じくフォルモサ住民の中に階級を育てているが、現地の平民を極東の他の植民地より無権利状態に置いている」(144頁)。この最後の確言から、「白人」カンの「非白人」日本人の植民地政策の能力に対する偏見を読み取ることができると思われる。

報告書の第二部『歴史的概論』は、第一章『日本攻略以前のフォルモサ』(146～150頁)、第二章『フォルモサの日本攻略』(150～154頁)、第三章『強盗行為の鎮静』(154～160頁)、『原住民との関係』(160～165頁)を含む。歴史的事実、時間的経緯、統計を駆使した論述は公平で着実であり、当時において高い価値を持っていたと結論できるが、現在の知識から見て未知の情報はほとんどない。台湾現地の状態がはっきり改善したのは、児玉・後藤行政の政策の結果である、とカンは正しく結論している(159頁)。

報告書の第三部『政治・行政体制』は、第一章『総督府、中央・地方行政、領土』(168～178頁)、第二章『司法、監獄、警察』(179～188頁)、第三章『財政』(188～196頁)、第四章『公共教育』(196～203頁)、第五章『公共事業』(204～212頁)、第六章『商売』(貿易を含む)(212～218頁)、第七章『農業と工業』(218～224頁)、第八章『人口、公共衛生』(224～232頁)、第九章『防衛』(232～234頁)で構成されている。軍事関係の情報はもっとも機密性が強かったので、防衛についての章は特に簡便になったことをカンは強調した(232頁)。

報告書の第三部を細かく解説する必要はない、と筆者は考える。「事実



のみ」という原則に従って、カンは収集された統計情報を紹介したのみであるが、自分の意見は第一部『総合的判断』に示している。具体的問題についてカンの評論は学問的に興味深いものだと結論できる。

植民行政と原住民との武力闘争にいたる様々な摩擦の理由の一つは、台湾での日本の法律・司法の運用であった。植民地の状況、特に原住民の法観念と慣習法は本土と基本的に違ったので、台湾人は日本の法律を理解できず、その運用を圧迫と見なした。植民政策の基礎と方法を策定・実施する際、後藤新平とその協力者は、日本の政治的、経済的目的と利益の理解ばかりでなく、さらに台湾の「旧慣」とその特徴の検討、理解を踏まえた。台湾での日本の法律・司法の発効を将来の戦略的、長期的作業と考える後藤等は、短期的、戦術的作業として、現地の状況に適した臨時的法律を準備した。特に所有権と相続権の規制については、台湾の慣習法との適応が必要になった、とカンは強調した(179～180頁)。

台湾での司法の状況を検討する際、このフランス人分析官は、現地の監獄を「日本帝国における最良のもの」と評した(185頁)。当時外国人が台湾の監獄を見学するのはほとんど不可能であったので、カンが自分の目でその監獄を見たかどうかは分からない。見学したのであれば、当然その事実を挙げたと思われる。15年後、1921年に親日評論家として知られているアメリカ人旅行家・作家プルトニー・ビゲローウは、台中の監獄を見学させてもらい、その仕組みと状態をほめちぎっている<sup>(6)</sup>。

阿片常用の問題は、もう一つの政治的な宿痾であった。後藤は、医者としても、官僚としても、阿片常用の全体的禁止を実行できないことと考えて、その減少を目的として、阿片の生産・販売を国家独占にした。カンは、その政策の目的を正しく理解したが、阿片販売の収益があまりに高いので、植民行政はその使用許可を緩和した、と指摘した(192～194頁)。

台湾の経済状況を詳しく検討したカンは以下のように結論した。「10年間で輸出も輸入も二倍ぐらい高くなった。それは良い結果である。しか

し、〔日本〕行政が、本土の利益だけでなく、植民地〔台湾〕と他国の利益をも併せ考慮すれば、その結果はもっと高くなるはずだ」（213頁）。

このフランス人分析官の見解によると、「日本人は、その忍耐力にもかかわらず、現地の農民との競争に負ける」し、「商人として大陸の中国人との競争にも負ける」ので、台湾在住の日本人は「主に官僚、また商人、手工業者などであり、大都市に住んでいる」（226頁）。統計はこの結論を立証するが、日本人と中国人の比較について筆者は判断できない。

報告書の第四部『農業生産』（237～293頁）と第五部『資源』（295～323頁）は、情報が詳しく、報告者の評価がほとんどない。日本側の公式な統計に基づいてカンは、台湾開発の成功を認めた。

「汽船事情の偶然の結果のため」カンは澎湖諸島を数時間訪問できた。台湾の主要な軍事基地にして「戦略上重要な地点」である澎湖諸島は、外国人の来島が公式には禁止されていなかったが、ほとんど不可能であった。工夫の才があるカンの澎湖諸島訪問が、本当に「偶然の結果」であったかどうかは疑問である。カンは「台北に帰った後、私〔カン〕はもっと冷かな待遇を感じて、島〔台湾〕での駐在の期間を短くすることにした」と語っている（132頁）。

#### 4. カンの『フォルモサ報告』の総合的評価

カンの『フォルモサ報告』をどう評価すべきか。筆者は、カンの統計データを個別に詳しく確認してはしていないが、カンが紹介した情報は日本発の統計・情報に基づいていたので、当時の他の資料と矛盾しない、とは結論できる。数字は同じであるが、評価の表現・言葉は異なる。カンは経済学者、法学者、官僚ではなく、地域の知識を持っているジャーナリストであった。カンの任務は情報の収集とその簡単な調査だけであった。のちに他の省庁の専門家はその報告書を検討・分析することになる。責任の

あるカンは詳しく正確な情報を収集したが、その報告書がどのように利用されたのかは、はっきりしない。

カンの評価と見解は、以後の欧米人（植民地政策の専門家、民族学者、教育者から旅行家に至るまで）の日本統治時代の台湾観と基本的に合致している<sup>(7)</sup>。具体的にはおおよそ以下の点である。

児玉・後藤行政の着任以前、台湾の植民経営政策は、弾圧的であり効果的ではなかった。その後の改革の成功は、主に新しい植民政策の戦略と戦術を編み出した後藤の功績であった。台湾「旧慣」の綿密な調査はその政策の成功の一つの原因になった。日本の植民行政は、台湾を近代化して、衛生的に安全な地域に変え、経済的開発を進めたが、その主要な目的は本土の利益を守ることであった。原住民に対する「文明化」政策（少なくとも欧米人が論じる「文明化」政策）が成功に至らなかったことは、後藤自身を含めて日本側の多数の官僚・専門家の認めるところである。

レジナルド・カン著『フォルモサ報告』は、日本統治時代初期の台湾に対する現在の概念を変えることはないが、情報文書としてそれを証明し、部分的に見直す契機になるかもしれない。いずれにしても、西洋（欧州）から見た日本植民政策および世界の中の「日本のイメージ」研究のために貴重な史料であると結論できる。

台湾から帰国した後、カンはおそらく極東・東北アジアを訪問することはなく、日本の対外・大陸・植民地政策も調査・評価しなかった。カンは、分析官の活動として、軍事問題と植民地政策の調査・研究を続けた。軍事特派員としてカンは、第一次世界大戦、のちにモロッコの第三次リーフ戦争に参加して、『1914年の戦役』（1915年）、『1914年のドイツ戦役案とその実行』（1923年）、『モロッコ保護統治』（1921年）などを執筆した。当時の軍事分析官はこれらの著作の情報と分析を高く評価している<sup>(8)</sup>。忘れられたカンの作業と作品を再検討することは、学問的に意味がある、と筆者は確信している。

《註》

- (1) 例えば, Goto Shimpei, *Formosa (Tai-wan): Its Present Financial and Economic Position* (London, 1902)。
- (2) *Japanese Rule in Formosa*, by Yosaburo Takekoshi, Member of the Japanese Diet, with Preface by Baron Shimpei Goto, Chef of the Civil Administration, translated by George Braithwaite (London: Longmans, Green, 1907)。
- (3) Garnot, Le capitaine [Eugene], *L'expédition française de Formose, 1884-1885* (Paris: Librairie Ch. Delagrave, 1894)。
- (4) Kann Réginald, *Journal d'un correspondant de guerre en Extrême-Orient: Japon — Mandchourie — Corée* (Paris: Calmann-Levy, 1905)。
- (5) Kann Réginald, *Rapport sur Formose* (Taipei: Academia Sinica, 2001)。  
本論文に引用したカンの文書は、すべてフランス語原文からの翻訳である。引用ページは本文に示した。
- (6) Bigelow Poultney, *Japan and Her Colonies* (London: Edward Arnold, 1923) pp.113-116。
- (7) その代表的論文は例えば, Charlotte Maria Birch Salwey, *The Island Dependencies of Japan* (London: Morice), 1913 (民族学者); Bigelow Poultney, *Japan and Her Colonies* (London: Edward Arnold, 1923) (政治評論家); Owen Rutter, *Through Formosa. An Account of Japan's Island Colony* (London: T. Fisher Unwin, 1923) (植民地政策の専門家); Harry A. Franck, *Glimpses of Japan and Formosa* (New York: Century, 1924) (旅行家・作家); Harold & Alice Foght, *Unfathomed Japan. A Travel Tale in the Highways and Byways of Japan and Formosa* (New York: Macmillan, 1928) (教育者) など。筆者はその資料の調査・研究を続けて、結果を発表するつもりである。
- (8) 例えばソ連陸海軍人民委員ミハイル・フルンゼは、「ミールスキー」のペン・ネームで執筆した軍事・政治評論『ヨーロッパの文明化者とモロッコ』の中でカンの著作を情報源として数回引用した。日本語の翻訳はない。ロシア語原文, M. Mirskyi, *Evropeiskiy tsivilizatsionnyy i Marokko* (Moskva: Voennyi vestnik, 1925)。